

紹介 | Introduction

カンボジア農村部の支援活動に関する考察
—2022年度に実施した支援者の調査から—

A Study on Support Activities in Rural Areas of Cambodia
:From A Survey of Supporters Conducted in 2022

仲井 勝巳

NAKAI Katsumi

尚美学園大学

総合政策学部非常勤教師

Shobi University

2023年6月

Jun.2023

カンボジア農村部の支援活動に関する考察

－ 2022 年度に実施した支援者の調査から－

仲井 勝巳

A Study on Support Activities in Rural Areas of Cambodia :From A Survey of Supporters Conducted in 2022

NAKAI Katsumi

[要旨]

本稿は、カンボジア農村部の支援者 2 名から 2022 年度にアンケートとインタビュー調査を実施し、活動内容を整理したものである。2 人とも現地の人々に寄り添うことを大切にしていた。SDGs エコビレッジの建設では、資金調達、現地素材の活用の重要性を示した。また、カンボジア農村部の教育活動では、小学校教員が小学校の教室や隣接した青空教室で、幼児教育を担うことが明らかになった。本調査は、限定的な人数が対象であるため、引き続きカンボジア農村部の環境や教育の在り方について調査し、持続可能な社会を目指していきたい。

キーワード

カンボジア農村部, 地域社会, 学校教育, 支援活動, SDGs

[Abstract]

This paper summarizes the details of activities based on questionnaires and interviews conducted in fiscal 2022 with two supporters in rural Cambodia. Both of them valued closeness to the local people. In the construction of the SDGs eco-village, it was important to raise funds and utilize local materials. In addition, in educational activities in rural Cambodia, it became clear that elementary school teachers are responsible for early childhood education in elementary school classrooms and adjacent open-air classrooms. Since the number of participants in this survey is limited, it is necessary to continue to investigate the environment and education in Cambodia's rural areas and aim for a sustainable society.

Keywords:

Rural Cambodia, Community, School Education, Support Activities, SDGs

1 はじめに

筆者は、過去にカンボジアを訪れ、学校や幼稚園の支援活動に参加してきた。そして、帰国後もカンボジアで支援活動に取り組んでいる団体と交流している。カンボジアを支援している日本人は一定数おり、今回、支援者がどのような思いで参加しているのか、これまでどのような支援活動に取り組んでいるのかを調査することによって、今後のカンボジアの未来につなげたいと考えている。筆者・仲井（2021b）は、カンボジア農村部で活動している支援者から SDGs エコビレッジ⁽¹⁾ の調査を行った結果、農村部の人々の収入は低く、出稼ぎや貧困の問題があること、村の子ども達は高校までほとんど進学していないこと、都市部で就職するには高卒でないと厳しい現状であることを示し、それらの問題を解消するには、村で産業が確立し、一定の収入を得ることが重要であると指摘した。そして、今後も支援活動に注視し、持続可能な開発目標を目指す上で、多くの可能性を模索することが必要であると示した。これまでの調査を踏まえ、2022 年度に調査し、引き続き支援者から調査を行い、支援活動の取り組みについて整理することを目的としている。

2 方法

2022 年度にカンボジアを支援する支援者にアンケート調査を実施した。その後、協力可能な支援者にインタビュー調査を実施した。インタビュー調査に関しては、活動内容について適宜質問を工夫するなどの半構造化面接（オンラインで 30～60 分程度）を行い、記録した。そして、支援者から得た調査記録、定期的に報告されている資料、筆者自身のカンボジアの支援経験を基に考察を行った。本研究は、大阪総合保育大学研究倫理委員会の審査にて承認（承認番号：児保研-069）を受けている。

3 結果と考察

アンケート調査およびインタビュー調査の協力を得た人数は 2 名であった。アンケート調査を基にインタビュー調査を行い、それらの結果を整理し考察していく。

3-1. 支援者 A のアンケート調査とインタビュー調査から

2022 年 11 月 17 日にアンケート調査の回答を得て、2023 年 1 月 15 日にインタビュー調査を行った。支援者 A⁽²⁾ はカンボジアに移住し、農村部の活動に力を注力している。支援者 A と筆者は、2009 年 12 月に現地で出会い農村部の学校建設に携わっている時からの知り合いである。

アンケート調査から、次のことが明らかになった。2009 年 11 月～2010 年 2 月にかけてバックパッカー 180 人と共に小学校を建設した。2014 年 6 月～2014 年 9 月に幼稚園を建設、その他、運動会、縁日、卒業式等を複数回実施した。2018 年より就労支援活動をスタートさせ、農村部の人の得意な自然素材を使って建設（竹建築等）、籐カゴ作りを続け

ている。支援に関わった対象は、幼児、小学生、中学生、高校生で、支援時期は毎日取り組んでいる。支援活動をして、良かったと思うことがあり、その理由として、就学、就労の場を広げられていること、そのことにより字の読み書き、計算ができるようになり、衣食住の底上げが可能となってきたことが挙げられる。支援活動をして、困ったことがよくあり、その理由として、日本と比べるとカンボジア農村部に揃っている物はかなり少なく感覚も違うため、クオリティを高める事に苦勞したことである。支援活動をする際に、気を付けていることは、日本での物さし（考え）を押し付けないようにしていることである。上限関係ではなく、お互いリスペクトし合える関係作りに気を付けている。そして、農村部に学校ができることに関して、誰にでも与えられて良い権利であると捉えている。

インタビュー調査から、次のことが明らかになった。SDGs エコビレッジの建築では、資金繰りを行っており予定が遅れていることがわかった。エコビレッジの要素は2つあることを改めて確認した。1つは、小学校を卒業できなかった子ども達が手に職をつけるために学ぶ場所を作ることであり、もう1つは、高校まで通うことができるようにすることである。現在、インターン生と共に、農村部の人々とコミュニケーションを大切にしながら取り組んでいることがわかった。

以上のことから、支援者Aへの調査では、予定よりも建設が遅れていることが明らかになった。資金繰りも要因としてあるが、カンボジア農村部では調達したいものがすぐに手に入らないことも進行に支障が出ていると懸念される。そして、現地の人々に寄り添い、就学、就労の場を広げられることの可能性を見出していることがわかった。また、図1より支援者Aの資料提供から、学校の概観はできていることがわかった。今後の課題として、資金調達、現地素材の活用、現地の人々と支援者のコミュニケーションを大切に、取り組むことが重要だといえる。



図1. 「エコビレッジの概観」（2023年1月の支援者Aからの資料より）

3-2. 支援者Bのアンケート調査とインタビュー調査から

2022年11月24日にアンケート調査の回答を得て、2023年1月18日にインタビュー調査を行った。

アンケート調査から、次のことが明らかになった。支援に関わった対象は、幼児、小学生、中学生、高校生、大人である。支援活動をしてやりがいはあると思ひ、その理由として、支援しているというより彼らと関わることによって自分自身が学ばせてもらっている、沢山の元気をもらっている感が強いから知らないことを知るといふ喜びがあることが挙げられる。また、支援活動をして良かったと思ひ、その理由として、彼らと関わることで狭い自分の世界から異質の世界に目を向けることができること、学ぶことばかりで知らないことを知るといふ喜びがあることが挙げられる。支援活動をして困ったことがどちらかといふばあり、その理由として、注意されたことがない人たちに注意することの難しさがあり、注意を怒りと誤解されてしまったことが挙げられる。農村部で活動する（支援する）際には、まったく生活環境の違ふ中で生活していれば、当たり前感覚自体も違ふことに気がつけていることがわかった。

インタビュー調査から、次のことが明らかになった。支援者Bは、10年以上前に大学の卒業研究で灌漑用水路を調べたことがきっかけでカンボジアと関わることになった。そして、研究後、カンボジアの歴史について興味を持ち、2016～2018年頃までシムリアップから車で1時間程度の距離にあるバンテアイスレイ村の小学校で、日本語を教えるボランティアをしていた。その村の人々は、田や畑をしており、収穫時期が終わるとタイへ出稼ぎに行く家庭もあった。ボランティアでは、幼児や小学1～6年生ぐらゐの年齢に日本語を教えていた。小学校の校舎で幼稚園ぐらゐの子どもが学ぶこともあった。日本語を教える際に、ひらがな、カタカナなどの日本語の歌（例えば、「チューリップさいた」など）で、リズムをとって工夫するなどしていた。小学校には、ホワイトボードやペンがなく、黒板はあるがチョークがよくつかないことがあった。そして、2018～2019年頃に、技能実習生を送り出すための日本語を教えることもあった。その後、2020年頃には、新型コロナウイルスの影響で日本に帰国することになった。アンケートの内容で「注意をされたことがない人」ということがあり、そのことをインタビューで調査すると、大人、20歳ぐらゐの人々は親に叱られたことがないのか、時間を守れなかつたり挨拶をしなかつたり、何かをもらえて当たり前であつたりと思つているといふ考えを持つていゐるのではないかと懸念していた。将来日本で働きたいといふ人もいたが、できなかつたことを注意すると怒られていゐると認識してしまふ傾向があり、伝え方、接し方に関して悩むことがわかった。

以上のことから、支援者Bへの調査では、過去の支援活動に関して、カンボジアの農村部において、現地の人々への日本語の教え方、交流、接し方について整理した。特に接し方については、支援者Bは現地の人に感謝していることがうかがえた。しかし、伝えたい内容、意図と異なる捉え方をする人との接し方に困難さがあることがわかった。また、農村部では、まだ幼稚園がないところもあり、当時バンテアイスレイ村では、小学校で幼児を教えていることが明らかになった。このことは、2021年1月に、筆者自身もカンボジアの支援活動で、トロペアントム村を訪れた際に同じ光景を見たことがある（図2）。村の小学校に隣接された青空教室に、小学校教員が幼児ぐらゐの年齢を対象に授業を行つていた。青空教室の様子



図2.「青空教室で幼児が学んでいる様子」（農村部の小学校に隣接して）⁽³⁾

では、子ども達は席に座り、先生の話聞いて歌を歌ったり、何かを書いたりしていた。支援者Bの話や筆者自身の経験から、幼稚園が建設されていない農村部では、小学校教員が幼児教育を担い、授業を実施している傾向があるといえる。これは、幼稚園がない農村部で、保護者が幼児を小学校に通わせることで仕事に取り組み、教育における幼小の連携を図ることができ、大変良いことであると推察される。このような農村部の教育の在り方は、都市部にはあまり見られず、また聞いたことがなかったため、農村部独特の取り組みである可能性が高い。本調査で、農村部の幼保連携や教育のあり方に関して、事例的に明らかにしたことは、一定の成果があるのではないだろうか。

4 まとめと今後の展望

本調査では、主にカンボジア農村部の支援者2人からアンケートとインタビュー調査を行い、筆者自身の支援活動の経験も含めて考察し整理した。2人とも現地の人々に寄り添い支援活動に取り組んでいる、あるいは、当時取り組んでいたことが明らかになった。特にSDGs エコビレッジでは資金繰りに困難さがあること、農村部の小学校で幼児教育が展開されることがわかった。

カンボジアの農村部は都市部と比べ、仕事が多くなかったり、経済的に厳しい家庭があったり、幼稚園がなかったり、中学校や高等学校が付近になかったりする。今回の調査では、支援者2名という限定的な人数であること、農村部という限定的な地域であることが指摘される。今回の調査を基に、今後さらに具体的に調査を展開し、時には筆者自身もフィールドワークに参加して農村部の環境や教育について、より良い支援の在り方について明らかにしていくことも重要であると考えられる。そして、持続可能な社会への構築に繋げていきたい。

注1

本調査における SDGs エコビレッジとは、学校、工房、農業、宿泊、遊び場がひとつになった施設である。そして、確かなエコ建築技術、竹加工事業、商品販売事業、豊かな土地と農業、デザインされた魅力ある観光施設、公立学校、つまり夢を見つけられる SDGs スクール、関わった人々の溢れた遊び場になることを目指している。カンボジアには豊かな自然とともに、竹素材を使った建築技術があるが、職人の人数は多くない状況である。支援者 A が携わる法人団体では、竹建築や竹商品の価値を高める活動を行い、竹建築の質・スピード・デザイン性を引き上げるために、現地の竹職人と連携を図り日本の竹技術も現地で応用している。

注2

支援者 A に関しては、以前の調査（仲井：2021b）においても同様にインタビューを行っており、カンボジア農村部では、インフラが進んでいないこと、収入が低いことを調べ、その原因として、「稼げる仕事がない。就ける仕事がない。読み書きができず仕事の選択肢が少ない。」等があることを示した。女性は「籐」を使って、籠、アクセサリ等を作成し、フェアトレードとして販売を展開している。男性は竹建築を仕事にし、土地の柵、入り口、窯を作った。SDGs エコビレッジは小学校の認可を受ける予定であり、学歴に関係なく職業訓練的な要素を持つ。村の子ども達は高校まで進学できておらず、都市部で就職するには高卒でないと厳しいため、将来的に子ども達の職種の幅を広めることが期待される。竹建築の大工との打ち合わせ、完成に向けて日々試行錯誤し、現地スタッフとの連携の重要性が必要である。

注3

図2に関しては、個人情報の配慮から写真を加工している。また、写真を得る際に関係者から同意を得ている。

付記

本研究において、アンケートやインタビュー調査に協力いただきました皆様、また、資料を提供していただいた皆様、ありがとうございました。

参考・引用文献

- 仲井勝巳（2020）「カンボジア農村部の小学校における科学教育・環境教育の試み」『日本科学教育学会年会論文集』44, 643-646.
- 仲井勝巳（2021a）「カンボジアの幼稚園・小学校における科学教育の試み—農村部でのフィールドワークを通して—」『聖学院大学論叢』33(1・2), 1-16.
- 仲井勝巳（2021b）「カンボジア農村部における SDGs エコビレッジに関する考察—法人代表者へのインタビュー調査と報告資料から—」『尚美学園大学総合政策論集』33, 51-60.